

「啐啄の機」

千葉 昇

昭和48年卒業（25回生） 国士舘大学准教授

雛が殻を破いて生まれようとする時、親鳥は同時に外から殻を突いてこれを助けると言います。「同機」（ベストタイミング）は、何事にも欠かせないものです。とりわけ教育の世界では、この「同機」こそが、不可欠の要となるものです。

「おそらく何かを教える仕事に就く！」そんな漠然とした将来像を描いていた高校3年の夏、突如、父親が他界しました。芸術方面にも将来の夢を描いていましたが、教師への道の選択は、そのとき決断していたのかも知れません。

7人兄弟の末の双子でしたから、その環境は一変します。できる限り学費の負担を掛けるわけにはいかないそんな状況下、学芸大学へと進みます。

では一体、教師として何を教えるのか・・・この自問自答は、在学中繰返していくこととなります。「高校で日本史を教える」・・・至極当然の様に、自分の専門性を生かす方向を見つめていました。奇しくも免許は、小・中・高の3免許を取っていました。

教育実習には3回出ることになります。その中で、全人的に子どもと関わる初等教育に出会います。学級を創り、子どもと共に授業を創り上げる醍醐味を意識するようになります。もし、この環境の中で自分の専門性である歴史学も活かすことができたなら・・・それが初等教育へ長く関わるスタートになります。

我逢人（がほうじん）とは、人と会うことから全てが始まるという例えです。

大学時代には、歴史学という学問追究を導いてくれた恩師との出会いもありました。当時、何軒も掛け持ちしていた家庭教師では、教え子との出会いも数多くありました。中にはやんちゃながらも真っ直ぐな中学生にも出会いました。夏の特訓と称して朝6時から共に走り、締めて勉強といった、無謀ながら熱い試みにも挑んでいました。その子も今や教師の道へ・・・これも「啐啄の機」の成せることなのでしょう。

教師として子どもとの「結い」は、公立小学校を手始めに長く学芸大学の附属小学校へと展開します。附属学校とい

う処は、各教科の専門家の中で自分を磨く厳しい環境です。管理職まで務めることになるこの25年の経験が、今も大きな礎になっていることは言うまでもありません。実践を磨き、自分を磨く日々は正に1年間に数年分の力を積み上げる、一行三昧の邁進でした。

行到水窮處（行きては到る水のきわまるころ）の如くいつの間にか次なる自分の道へと辿り着くものです。

50代前半で、積み上げてきた授業創造のスキルと実践的指導力を武器に大学へと出ることになります。

附属学校という現役バリバリの先生方と築いた最先端の教育現場から、未来の教師を目指す学生たちの育成に、更なる可能性を求めたからです。

「共に創る授業」は、大学へ移った今でも自らの信条です。もちろん講義中は、個々の名前を呼び、共に創り学びます。一方的な講義で終わることはありません。それは「共に創る授業」を求め続けて欲しいとの願いからです。そして自分を磨き、将来に渡って学び続ける教師であって欲しいとの願いからです。これも「啐啄の機」としての願いでしょうか。

子どもの「なんで？」の質問に対して、言葉で押さえ込もうとすると、「なんで？」は限りなく繰り返されます。しかし活動や体験に根付いた自分の問題発見から出発し、問題追究、自己表現を大切にすると、子どもたちは自ら求めて考え続けます。そして、「面白い」「わかった」の声へと到ります。それを支える教師には、常に「問題解決の為に創造性」と「追究力」、そしてその土台である「子ども理解」が求められます。

これは、教育現場へ指導に出る時も同じです。先生方との研究会では、共に授業を創り、共に研究開発を求めて生み出していきます。それは「子どもたちをもう一歩前へ」という意思がやはり同じだからです。

「啐啄の機」で成立する教師の道、これをめざす未来の教師である高校生の皆さんに期待をしています。

（朝陽同窓会のご協力を得て「先輩からの言葉」を掲載しています。）